

# 大正期の『婦人公論』における外来語表記の変遷

石 井 久美子

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科  
『人間文化創成科学論叢』第15巻（2012年）  
2013年3月発行 抜刷

# 大正期の『婦人公論』における外来語表記の変遷

石 井 久美子\*

## Notational shift of loanwords in *Fujin Koron* published in the Taisho period

ISHII Kumiko

### Abstract

The purpose of this paper is to introduce how loanwords were put down in writing in the Taisho period. Eight types of notation of loanwords consisting of a combination of kanji, katakana, hiragana and alphabet were observed in six volumes of a general magazine, *Fujin Koron*. The two most frequently found forms were kanji with katakana ruby and katakana only, though different notations were used for the purpose of presenting information in an easy to understand way.

The two major findings of the research are as follows. (1) As the studies to date show, the notational styles of loanwords gradually shifted from kanji to kana. (2) Loanwords with ruby notation decreased in number though it was an accepted rule in the magazine to add ruby to all kanji. Both (1) and (2) show similar shifts since the reduction in the number of kanji used made it possible to reduce the number of ruby. These findings are in accordance with the then trend to simplify the notational systems. So it can be said that the notational style of loanwords in the Taisho period underwent a simplification process from kanji-with-ruby to katakana-only.

Key words: the Taisho period, loanword, notation, shift, *Fujin Koron*

### 1. はじめに

大正期は外来語が日常に浸透し、本格的に増加し始めた時期だといわれている<sup>1</sup>。15年という期間の短さから、明治や昭和との繋がりの中で言及されることが多く、大正期の言語生活の実態は明らかになっていない。本稿では、大正期の代表的な総合雑誌である『婦人公論』を取り上げ、当時の外来語表記の特徴と変遷を明らかにする。

### 2. 先行研究

大正期の外来語について詳細に調査した研究は少なく、外国地名に限定したものが散見される。大正期の資料が調査範囲に入っており、外来語の表記について言及しているものに、国立国語研究所（1987）や深澤（2003）、山本（2009）など<sup>2</sup>がある。

国立国語研究所（1987）は、『中央公論』を対象とし、1906（明治39）年から10年ごとに1976（昭和51）年までの計8年分を調査している。そのうち大正期に該当するのは、1916（大正5）と1926（大正15・昭和1）である。外来語表記の変化については次のように記述している。

---

キーワード：大正期、外来語、表記、変遷、『婦人公論』

\*平成24年度生 比較社会文化学専攻

外来語全体が年々ふえているのと逆比例して、漢字がきはへってきた。いま、「アメリカ～阿米利加」のように、カナがきと漢字がきと、両方でてくるものについて、合計すると、(表略) 1926年に逆転している。(P.189)

深澤 (2003) は、『太陽』を対象とし、1895 (明治28) ～1928 (昭和3) 年の1月号の外国地名を調査している。カタカナ表記語の割合については、国立国語研究所 (1987) と同様の指摘ができるとする。大正期に限って見ると、前半にルビ表記や漢字表記が主流だったものが、後半にはカタカナ表記に移行しているという。

山本 (2009) は、外国地名の漢字表記に関して、1875 (明治8) ～1925 (大正14) 年の新聞4紙を5年ごとに調査している。その中で以下のように指摘している。

1920年から1925年で外国地名漢字表記の全体数は一気に減り、漢字表記される地名の種類も減少する。(P.94)

このように、国立国語研究所 (1987)、深澤 (2003) と同様の結果を得ている。

### 3. 使用する資料とデータ

本稿で使用した『婦人公論』は、現在も中央公論新社から発行されている総合雑誌である。その創刊は、大正5 (1916) 年1月である。大正期のものは全て『DVD-ROM版婦人公論』(臨川書店編集部、臨川書店、2006) に収録されており入手がしやすく、当時の雑誌そのものがPDFデータとなっているため、表記の確認にも適している。『婦人公論』は外来語や表記に関する先行研究が少なく、研究の余地が多く残されている資料である。

記事には、次のようなものが取り上げられている。

創刊時は公論欄を巻頭に知識婦人を対象とし高踏的装いで出発したが、昭和期には記事の評論的扱いからニュース的扱いに移行し、大衆的となった。通巻して恋愛、結婚、職業等、家庭と婦人の問題を取上げ、(中略) また時局に合わせ、国際、政治問題にも女性解放の観点から取組み、戦後は新たなイデオロギーの解明に努めた。(『日本近代文学大事典』P.350)

このように、国際問題から家庭のことまで幅広い話題を扱っている。著者には、女性や著名な人物も多く、職業も医学博士から歌人までバラエティに富む<sup>3</sup>。以上のような特徴が、大正期の言語生活における外来語の使用実態の把握に適切な資料であると考え採用した。

本稿のデータとして使用したのは、以下の6号分である。

- ・『婦人公論』大正5 (1916) 年1月号…第一号第一号新年号
- ・『婦人公論』大正6 (1917) 年1月号…第二号第一号新年大附録号
- ・『婦人公論』大正8 (1919) 年1月号…第四号第一号新年特別号『現代の悩み』号
- ・『婦人公論』大正10 (1921) 年1月号…第六号第一号新年特別号「人類の苦悶」号
- ・『婦人公論』大正12 (1923) 年1月号…第八号第一号新年特別号『家庭の革命』号
- ・『婦人公論』大正14 (1925) 年1月号…第十号第一号新年特別号「家庭病診断」号

創刊号と、昭和に移り変わる前年の大正14年<sup>4</sup>を大正初期と末期の代表として選び、その間の変化を見るために、大正6、8、10、12年を加えた。原則月1回の発行で、季節や発行月によって内容に偏りがあるということはない。そこで、最も分量が多い傾向にある1月号を選んだ。その中でも、各号の巻頭に置かれている「公論」という見出しのある記事を調査の対象とした。本文は漢字ひらがな交じり文で書かれており、大正5、6、8、10、12年は総ルビ、大正14年は原則総ルビで、記事によっては無ルビのものもあった。記事の数は、大正5年が13、大正6年が9、大正8年が10、大正10年が9、大正12年が13、大正14年が13の計67である。

### 4. 分析Ⅰ——大正期の外来語の表記的特徴

まず大正期の外来語にはどのような表記形式があるのかを調査した。対象としたのは外来語、外国語(原語表記されているもの)で、「台湾」などもとの漢字表記をそのまま使用した地名や「英国」「英」など略称は含めなかった。混種語については外来語部分のみを分析対象とし、混種語全体については別の機会に検討する。

【表1】外来語の表記形式

	記号	構成要素	例	延べ語数	異なり語数
単記形式	A	本行 <sup>5</sup> カタカナ	トルストイ	1443	500
	B	本行漢字	亜米利加	10	5
	C	本行アルファベット	America	7	6
ルビ形式	D	本行漢字+ルビカタカナ	イギリス 英吉利	271	91
	E	本行漢字+ルビひらがな	いんど 印度	71	9
	F	本行アルファベット+ルビカタカナ	ジャルシー Jalousie	9	7
併記形式	G	本行カタカナ+本行アルファベット	「ジエラシー」Jealousy	19	19
	H	本行漢字+本行アルファベット	げんざいてき 現在のPresent Man (男)	23	22

【表1】は表記形式の分類である。A～Hの項目は、『婦人公論』6号分において観察された表記形式をもとに作成したものである。これらは、カタカナのみ、漢字のみ、アルファベットのみの「単記形式」、外来語をルビに置いた「ルビ形式」、各要素を同じ大きさの字で前後に並べる「併記形式」という大きく3つの形式に分けることができる。表には、それぞれの構成要素、該当例、そして6号分に見られる延べ語数と異なり語数<sup>6</sup>を記した。分類にあたっては、漢字・ひらがな・カタカナ・アルファベットのどれで表記されているか、ルビの有無はどうか、という2点に注目している。ルビの形式については、進藤(1982)が詳しいが、外来語・外国語に関するルビ表記については細かく分類することをしていない。そこで、本稿では表記の特徴を明らかにするために、ルビの外来語がひらがな／カタカナのどちらであるか、また、本行が漢字／アルファベットのどちらであるかに注目し、D、E、Fという3種にまとめた。この分類をもとに、大正5、6、8、10、12、14年の6号分の表記形式の特徴を掴んでいく。まずは6号全体を通した、大正期の外来語の表記形式を明らかにする。

#### 4.1 頻度の高い表記形式

大正期を通じて頻度の高い形式はA(本行カタカナ)とD(本行漢字+ルビカタカナ)であった。この結果から、大正期の外来語は、現在と同様、カタカナのみの表記が用いられる一方で、漢字にカタカナルビを付けるという形式が一定数用いられていたことがわかる。

D(本行漢字+ルビカタカナ)は、延べ語数271例のうちの約4分の3(208例)が国名や都市名、人名、書名などの固有名詞である。特に国名が多く、固有名詞の延べ語数208例のうちの約4分の3(159例)を占めており、特定の号や筆者に偏りはなく、全年代に登場している。その他には、「哩」(T10)<sup>7</sup>のような単位などが見られた。D(本行漢字+ルビカタカナ)のタイプは特徴として、「部屋」(T8)といった具体的なものを指す語よりも「<sup>ポテンシャルティ</sup>潜勢的存在」(T14)のような抽象的な語が多いことが挙げられる。また翻訳漢語の場合、「<sup>さい</sup>一切の差別を<sup>アブストラクト</sup>捨象して」(T12)のように、ルビの外来語だけでなくあてられている訳語の方でも読み下せるように書かれている。

一方A(本行カタカナ)は、全1443例のうち、固有名詞が約7割(997例)を占める。D(本行漢字+ルビカタカナ)に比べると、「ニュージャージー」(T5)、「マサチューセツ州」(T8)といった州名や、「ハーバード<sup>だいがく</sup>大學」(T8)といった大学名が見られること、人名が固有名詞の4割(578例)を占めることが特徴的である。もちろんルビ形式と単記形式の両方が見られる、「英吉利」「イギリス」のような国名もあるが、A(本行カタカナ)のみの例

には、「トルストイ」といった人名や、上記の州名、大学名など、通用の漢字表記がないためにカタカナのみの表記とされたものが含まれていると考えられる。また固有名詞以外もバラエティに富み、衣服の「コート」(T5) など、飲食物の「カステラ」(T6) など、楽器の「ハーモニカ」(T14) など、資材の「コンクリート」(T12) など、建物の「ステーション」(T8) など、思想の「デモクラシー」(T5) などが見られた。即ち生活に密着した語から抽象的な語まで見られた。D (本行漢字+ルビカタカナ) に比べると、物を表す具体的な語が多かった。

#### 4.2 ひらがなルビの外来語

外来語ルビが付いているもののうち、E (本行漢字+ルビひらがな) は、外来語のルビがひらがなで書かれているものである。【表1】を見ると、延べ語数が71であるのに対し、異なり語数は9であり、何度も使われている語があることがわかる。該当例を見ると、「更紗」(T5) や「煙草」(T14) のようにポルトガル語や、「瓦斯」(T6) のようにオランダ語を原語としているものなどがある。これらは、日本に入ってきてから時間が経っており既に広く浸透し外来語の意識が薄れていると考えられる。

中でも、最も興味深いのは、「印度」が複数の著者によってひらがなルビで表記されていることである。インドの表記については先行研究にもいくつか指摘がある。貝(1997)の国定読本の調査には、第二期(明治43年～)は他の地名がカタカナ表記であるのに対し、「インドだけは「印度」と表記される」(P.199)とある。ひらがな書きに関しては、深澤(2003)は、注で「平仮名表記の例は「いんど」」(P.48)と挙げており、山本(2009)には「他地名が片仮名で振り仮名が振られている中で“いんど”と平仮名が振られ」(P.102)とある。大正元(1912)年発行の棚橋一郎・鈴木誠一著『日用舶来語便覧』を見ると、その付録「第十五章世界各国名及首都名」には、「印度」にルビがなく、前後に読み方のヒントとなるものもない。そのため、インドの表記は、ひらがなでルビを付けたり漢字のみで書かれることが珍しくはなかったと考えられる。身毒・天竺などと呼ばれたこともあったが、『日本国語大辞典』を見ると、最初の用例は次の通りである。

\*教行信証(1224)二「印度西天之論家、中夏日城之高僧」

他にも多数の古辞書に掲載があることから、その歴史は古く、漢字の浸透度が高かったことが表記に反映されたと考えられる。

【表1】からもわかるように、調査範囲内に、外来語をひらがなのみで表記している例は見られなかった。一方で、ひらがなルビを伴う表記は、A(本行カタカナ)やD(本行漢字+ルビカタカナ)に比べると多くはないが一定数用いられており、その語や漢字表記が古くから知られているために、もともとは外国語であったという意識が弱まっていることを示していると考えられる。

#### 4.3 ルビのない表記

原則総ルビの文章であるにも関わらず、ルビが使われずに書かれたものの中で、漢字のみのBや、アルファベットのみのCに注目する。

用例を見ると、B(本行漢字)は大正6年の近藤耕藏氏の「家庭科學欄」の記事に集中して見られた。その理由は、この記事が小見出しにルビを用いていないためである。本文中に、「瓦斯」という表記が見られるため、漢字に合わせて小見出しでも「瓦斯」という表記を使っている。ルビではなく、漢字に合わせるのは視覚的に統一感があることに加え、漢字のみの表記が当時使われていたからだと考えられる。

一方、C(本行アルファベット)は全体で7例見られた。うち3例は、「あちらの言葉で云へば“courting parlors”」(T8)というように、ある外国語でどのように言うかを説明するとき、原語をそのまま示している用例である。残りの4例は、「子供に読ませたい書物」(T12)という公論で、以下のように英語の児童書のタイトルを並べている例である。

Bobbsey Twins Seris  
John Maitin's Book  
Little Folks  
Holiday Annual

総ルビの文章であるにも関わらずルビが付けられていないのは、カタカナに直さず原語のみを表示したい場合に

選択された形式だといえる。

#### 4.4 重層的な表記

外来語を示すために2つ以上の表記を組み合わせた「重層的な表記」は、調査範囲内に4種類見られた。【表2】では、その4種について具体例を記載し、【表1】の表記形式の分類記号との対応がわかるようにまとめた。

【表2】重層的な表記

	ルビ形式	併記形式
カタカナとアルファベットの組み合わせ	F… <sup>ジャルシー</sup> jalousie	G…「ジエラシー」Jealousy
カタカナ／ひらがな／アルファベットと漢字の組み合わせ	D… <sup>イギリス</sup> 英吉利 E… <sup>インド</sup> 印度	H… <sup>げんざいでき</sup> 現在のPresent H… <sup>をとこ</sup> Man(男)

「カタカナとアルファベットの組み合わせ」であるF（本行アルファベット+ルビカタカナ）やG（本行カタカナ+本行アルファベット）において、カタカナ表記の外来語が示すものはアルファベットで書かれた外国語の読み方である。あるいは見方を変えれば、アルファベットで示された外国語は、カタカナ表記の外来語の原語だといえる。カタカナ表記の外来語は、ルビ形式の場合にはF（本行アルファベット+ルビカタカナ）のようにルビに置かれ、併記の場合にはG（本行カタカナ+本行アルファベット）のように前に置かれている。このように、「カタカナとアルファベットの組み合わせ」においては、外来語を主に読ませる表記方法が取られていることがわかる。両表記の使い分けを以下に取り上げる。

英語の「ジエラシー」<sup>えいご</sup>Jealousy.フランス語の<sup>ふつご</sup>jalousie.イタリア語の<sup>いたりご</sup>Jelosiia.は語源を同うして居る。(T5)

ここでは、英語、フランス語、イタリア語の3種が挙げられているが、英語だけが「ジエラシー」Jealousy.と併記形式をとっており表記が異なる。英語の「ジエラシー」のみが勝屋英造著『外来語辞典』（大正3年）に見出しとして掲載があり、3種の中で最も通用の語であったといえることができる。併記形式にすると、外来語のカタカナはルビ形式よりも大きなサイズで書かれることになるため強調される。それに対し、フランス語とイタリア語の方は原語を示すことが目的であり、ルビは読みを助けるものでしかないとも考えられ、併記形式ほどにはカタカナ表記は強調されない。同じような表記の組み合わせでありながら、その視覚的効果を念頭に使い分けられているといえる。ルビ形式には、「fin de siecle」(T10)のような分かち書きにルビが付された例も見られ、外国語とそのカタカナ表記を一対一対応で示すのに用いられていることがわかる。

一方、「カタカナ／ひらがな／アルファベットと漢字の組み合わせ」として、【表2】に示したように、ルビ形式にはD（本行漢字+ルビカタカナ）とE（本行漢字+ルビひらがな）、併記形式にはH（本行漢字+本行アルファベット）が該当する。漢字表記されている訳語は「<sup>リクリエーション</sup>造り換え」(T12)のような和語の他に、ルビ形式では<sup>アブソリュート・スタンダード</sup>翻訳漢語（「絶対的標準」(T12)）と<sup>ロシア</sup>音訳漢語（「露西亞」(T6)）、併記形式の場合は<sup>よきてき</sup>翻訳漢語（「豫期的（未来）Prospective.」(T5)）が該当する。ルビ形式の音訳漢語は外国地名が非常に多くを占めている。訳語と組み合わせる場合、ルビ形式では外来語が、併記形式では外国語が用いられている。

用例の中には、アルファベットと漢字の併記によってしか表せないものがある。それは、「<sup>しやうほんのう</sup>所有本能Instinct of Acquisition」(T5)のように、外国語と、対応する訳語の語順が逆転している場合である（Acquisition＝所有、Instinct＝本能）。同じ理由で、「<sup>さんげふ しんり がくてきもんだい</sup>『産業の心理學的問題』(Psychological Problems of Industry)」(T14)のように書名を併記形式で表記した例が見られる。この形式では、訳語によって内容を示しながら同時に原語のタイトルを示すことが可能である。

「カタカナ／ひらがな／アルファベットと漢字の組み合わせ」における併記形式とルビ形式の差は、併記形式の場合は、基本的には前に来る訳語が主だが、ルビ形式ではルビの外来語が主となる点である。漢字とアルファベットの併記形式であるHのうち、例外として、以下の4例を確認できた。

「Man（男）は、Man（人間）だが、Woman（女）はMan（人間）でない」(T5)

Manが男とも人間とも訳せることを活かした表現である。外国語が前で訳語が後になると、外国語が目され

る。

こうして見てくると、『婦人公論』の総ルビという表記形式が活かされていることがわかる。重層的な表記は大正期を通じて見られ、なんでもカタカナのみで表記するのではなく、外来語・外国語・訳語のどれを強調するか、あるいはその語表記の浸透度によって、必要な要素を組み合わせる方法が採られていたのである。

## 5. 分析Ⅱ——大正期の外来語表記の変遷

「4. 分析Ⅰ」では、大正初期から末期までの6号分のデータをもとに、大正期の外来語の特徴を捉えた。ここからは、同じ6号分のデータを用い、大正期の外来語表記の変遷を見ていく。【表1】で示した表記形式A～Hは、その構成要素から次の4つのグループにまとめられる。

- 〈a〉漢字表記を含むもの…B、D、E、H
- 〈b〉仮名表記のもの…A、F、G
- 〈c〉外来語ルビが付いているもの…D、E、F
- 〈d〉外来語ルビのないもの…A、B、C、G、H

以下、〈a〉～〈d〉のグループを用いて分析していく。

### 5.1 漢字表記を含むものと仮名表記のもの

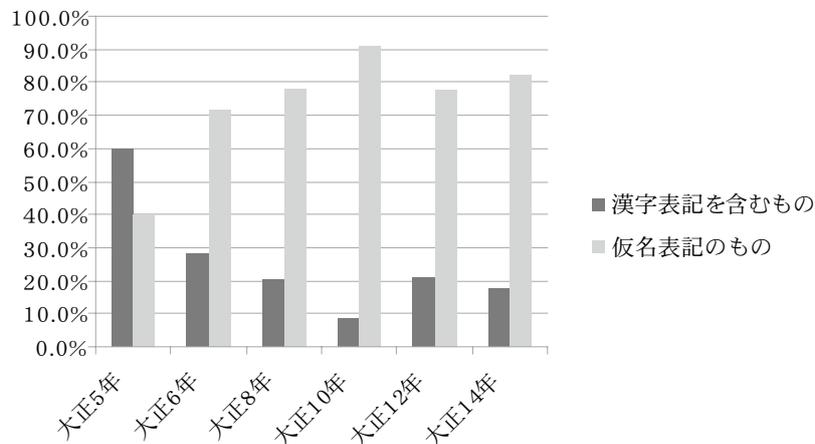
〈a〉の「漢字表記を含むもの」というのは、外来語が漢字表記のみで示されているもの、あるいは、ルビ形式や併記形式を用いて、外来語・外国語に対し翻訳漢語や音訳漢語などが示されているものをいう。これらの漢字表記は「木乃伊」(T14)のように中国由来であったり、「協同組合」(T12)のように外来語理解のための注記の役割をする語であったりする。そのため、これを観察することにより、外来語受容にあたっての、漢字・漢語依存度が確認できる。

比較対象として、〈b〉の「仮名表記のもの」を並べてみる。ここでの仮名表記とは、漢字表記を含まず、ひらがな・カタカナ単独か、あるいはルビ形式や併記形式でアルファベットを伴っているものをいう。漢字表記と仮名表記の割合を【表3】に、両者の比較を【図1】のグラフに示す。

【表3】大正期の外来語の漢字表記と仮名表記の変遷

	大正5年	大正6年	大正8年	大正10年	大正12年	大正14年
漢字表記を含むもの	60.2%	28.4%	20.6%	8.8%	20.9%	17.5%
仮名表記のもの	39.8%	71.6%	78.3%	91.1%	77.5%	82.4%

【図1】大正期の外来語の漢字表記と仮名表記の変遷



大正10年の結果は両者の差が大きい、全体的に漢字表記が減少傾向にあり、仮名表記が増加傾向にあるといえる。大正5年と大正6年では両者の割合が逆転していることも注目すべき点である。

人名地名に関しては、大正12年5月2日に臨時国語調査委員会が発表した常用漢字表の凡例に「二、固有名詞ニハ本表ニナイ文字ヲ用キテモ差支ナイ。タメシ外國（支那ヲ除ク）ノ人名地名ハ假名書スルコト。」とある。時代的な背景としても外来語は仮名書きする方向に向かっていた。

この、漢字表記から仮名表記への移行は、「2. 先行研究」で挙げた国立国語研究所（1987）、深澤（2003）、山本（2009）でも指摘されている。よって、先行研究で使用された『中央公論』、『太陽』、各紙新聞に限らず、『婦人公論』でも確認できたといえる。国立国語研究所（1987）や深澤（2003）では、1926（大正15）年での急激な転換が指摘されている。集計方法に違いがあり、大正初年や昭和期のデータがないため、安易な比較はできないが、【図1】のグラフを見る限り、早い段階から仮名表記への移行が起こっていると予想される。

### 5.2 ルビの有無

〈c〉の「外来語ルビが付いているもの」と、〈d〉の「外来語ルビのないもの」を取り上げ、ルビの有無という観点から考える。外来語の中の割合をそれぞれまとめたのが【表4】で、それをグラフ化したものが【図2】である。

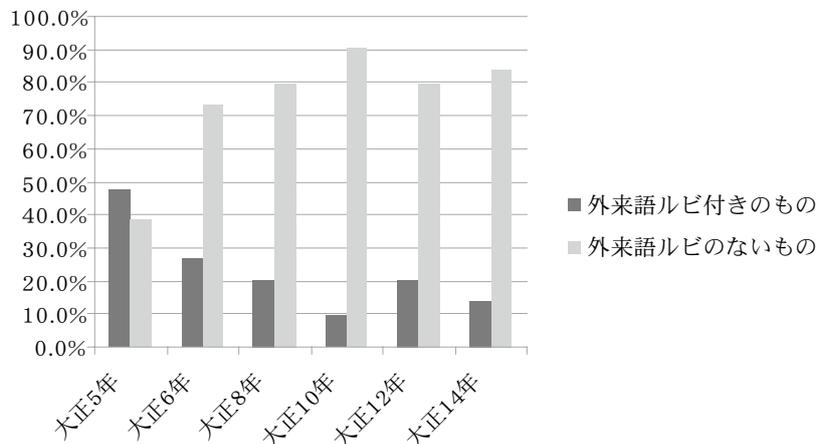
〈d〉のルビのない表記は、大正10年が90.2%と非常に多くなっているが、平均すると、少しずつ増加する傾向にあるといえる。一方、〈c〉のルビ表記は、大正10年が9.6%と非常に少ないが、平均すると、少しずつ減少する傾向にあるといえる。【表3】、【図1】同様、大正5年と大正6年では両者の割合に逆転が起きている。

5.1の漢字表記と仮名表記での結果と見比べると、〈b〉の仮名表記と〈d〉のルビのない表記はいずれも大正5年から大正14年にかけて増加傾向にある。一方、〈a〉の漢字表記と〈c〉のルビ表記は減少傾向にある。先に、外国地名の仮名表記を推奨する規範を取り上げたが、漢字については、明治初年から全廃論や節減論、擁護論など議論が盛んであった。大正期には臨時国語調査委員会が設けられ、常用漢字表が示された。これらの動きに一貫している考え方は、多様な字体や表記方法を統一し扱いやすくすることであった。一方、ルビに関しては、1938（昭和13）年に山本有三が『戦争とふたりの婦人』のあとがきに「國語に對する一つの意見」と題して書いた振り仮名廃止論が一大議論を巻き起こす。その振り仮名廃止論には「一、むづかしい字句や、あて字を使はないやうになるから、おのづから漢字制限を實行することになる」とある。ルビを廃止するためには漢字を

【表4】ルビの有無からみた大正期の外来語の変遷

	大正5年	大正6年	大正8年	大正10年	大正12年	大正14年
外来語ルビ付きのもの	47.4%	26.9%	20.6%	9.6%	20.5%	14.0%
外来語ルビのないもの	38.3%	73.1%	79.4%	90.2%	79.5%	84.2%

【図2】ルビの有無からみた大正期の外来語の変遷



統一し易しくすることが必要であり、漢字が単純化すればルビは必要なくなる。つまり、両表記の減少の動きは連動するのである。『婦人公論』の外来語表記には当時の時代背景がよく表れており、漢字とルビの減少という両者の連動した動きが見られた。

## 6. 結論

本稿では、大正期の外来語表記の特徴とその変遷を捉えた。

まず、大正期の外来語表記の特徴を分析した。単記形式、ルビ形式、併記形式の3種の形式とそこに用いられている字種から、使用されている外来語の表記形式を8つに分類した。

カタカナのみと、漢字にカタカナルビという2つの頻度の高い表記形式において、語の意味領域と表記の関係を見た。その結果、固有名詞では、国名は漢字を伴う表記がしばしば用いられるが、通用する漢字表記のない人名や州名、大学名などではカタカナのみの表記が用いられていた。固有名詞以外では抽象的な語はルビ表記で、衣服、飲食物、楽器、資材、建物など具体的な物を示す語はカタカナのみで表記される傾向が見られた。

2つ以上の表記を組み合わせる「重層的な表記」としては、ルビ形式と併記形式が見られた。それぞれ「カタカナとアルファベットの組み合わせ」と「カタカナ／ひらがな／アルファベットと漢字の組み合わせ」があり、計4種が観察された。これらの「重層的な表記」は外来語、外国語、訳語のどれを強調するか、また必要な情報はどれであるかによって使い分けられている。

ルビ形式と併記形式の特徴はそれぞれ以下の通りであった。

ルビ表記では、ルビに置かれた外来語が主となるが、翻訳漢語の場合は訳語の側でも読むことができるように書かれていた。併記形式とは異なり、「fin de siècle」のような分かち書きされた複数語からなる句でもカタカナルビをアルファベットと対応させて示すことが可能である。ルビにはカタカナだけでなくひらがなの外来語も用いられており、それらは古くからその語や漢字表記が知られているものであった。

一方、併記形式では、カタカナ表記の外来語や訳語が前に置かれ、アルファベットが後に置かれる形式が基本であった。併記形式の場合、前に主となるものが置かれていると考えられる。また、外国語と訳語の語順のずれに関係なく表記ができ、原語と同時に訳語によって内容を示すことも可能である。

次に、大正期の外来語の変遷を見た。その表記形式は、大正初期から末期にかけて、漢字表記から仮名表記へ、そしてルビのある表記からルビのない表記へと変化している。

漢字表記から仮名表記への変化は、先行研究でも指摘されているが、『婦人公論』においても漢字を伴う表記が減少し、仮名表記が増加するという傾向が見られた。大正12年に出された常用漢字表でも外国地名を仮名表記するよう書かれており、当時の外来語表記が仮名表記の方向へ向かっていたことと一致する結果である。また、先行研究では大正15年に漢字表記と仮名表記の逆転が起きることが指摘されていたが、『婦人公論』では、大正5年から大正6年にかけて両者の割合に逆転が起きている様子が確認された。調査方法の違いもあるが、先行研究よりも漢字表記と仮名表記の逆転は早い段階から起こっていた可能性が示唆される結果を得た。

この逆転現象は、漢字表記と仮名表記の間だけでなく、ルビの有無という観点でも観察された。当時の規範はルビをなくす方向に向かっていた。ルビを減らしていくことは、漢字をあて字などの難解なものから容易なものにすることによって実現される一面があり、漢字とルビの減少は連動している。この社会的な傾向は、『婦人公論』の大正期の記事に登場する外来語表記にも表れている。漢字の減少とルビの減少は、外来語をルビに置き漢字をあてた表記から、カタカナだけの単純な表記へ、という変化によって起こったものだとはいえる。

今回は『婦人公論』の外来語、外国語の表記形式を中心に扱ったが、今後は、当時同じく中央公論社から発行されていた『中央公論』を用い、ルビのない文章を調査するなど、同時期発行の資料での外来語表記にも注目し、大正期の外来語の実態をより鮮明にしていきたいと考えている。

## 註

1 橋本和佳 (2010) 『現代日本語における外来語の量的推移に関する研究』 ひつじ研究叢書〈言語編〉第86巻、ひつじ書房、P.76

- 2 その他、貝（1997）の国定読本の調査、井手（2005）の『太陽』の調査などがある。
- 3 執筆者数は、大正5年が男16人・女3人、大正6年が男7人・女1人、大正8年が男7人・女37人、大正10年が男8人・女1人、大正12年が男47人・女2人、大正14年が男8人・女5人の、延べ142人（男93人、女49人）である。
- 4 『婦人公論』の大正の表示は大正16年までであるが、年末に大正から昭和に元号が変わったためであり、大正16年1月号は実質昭和2年1月号ということになる。
- 5 例えば、「本行」とは「英吉利」の「英吉利」部分を指し、「ルビ」とは「イギリス」部分を指す。
- 6 異なり語数において、ブルジョア／ブルジョア、ロシヤ／ロシアのような仮名表記のゆれは区別せずに数えた。
- 7 「T10」とは大正10年のことである。以後、この形式で、用例とともに掲載年を示すこととする。

## 参考文献

- 井手順子（2005）「外国地名表記について——漢字表記からカタカナ表記へ」『国立国語研究所報告122雑誌『太陽』による確定期現代語の研究—『太陽コーパス』研究論文集』博文館新社
- 井之口有一（1982）『明治以後の漢字政策』日本学術振興会
- 貝美代子（1997）「国定読本の外来語表記形式の変遷」『国語論究第6集 近代語の研究』明治書院
- 国立国語研究所（1983）『現代表記のゆれ』
- 国立国語研究所（1987）『国立国語研究所報告89雑誌用語の変遷』秀英出版
- 進藤咲子（1982）「ふりがなの機能と変遷」『講座日本語学6 現代表記との史的対照』明治書院
- 日本近代文学館・小田切進編（1978）『日本近代文学大事典』第五巻、講談社
- 日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部編（2003）『日本国語大辞典第二版』小学館
- 白水社編（1938）『ふりがな廃止論とその批判』白水社
- 橋本和佳（2010）『現代日本語における外来語の量的推移に関する研究』ひつじ研究叢書〈言語編〉第86巻、ひつじ書房
- 深澤愛（2003）「漢字平仮名交じり文中における表記の選択——博文館『太陽』における外国地名の漢字表記と片仮名表記——」『日本語科学』第14号
- 古田東朔（1989）「明治以降の国字問題の展開」『漢字講座第11巻漢字と国語問題』明治書院
- 松井栄一・曾根博義・大屋幸世監修（1995）『近代用語の辞典集成24日用舶来語便覧』大空社
- 松井栄一・曾根博義・大屋幸世監修（1995）『近代用語の辞典集成25外来語辞典』大空社
- 山本彩加（2009）「近代日本語における外国地名の漢字表記——明治・大正期の新聞を資料として——」『千葉大学日本文化論叢』第10号